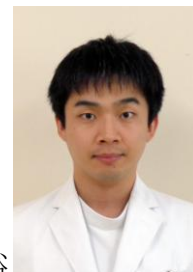


和歌山病院での実習を終えて



上田 洲裕

この度、3週間にわたり選択制臨床実習を和歌山病院呼吸器内科で行わせていただきました。昨年度、呼吸器・腫瘍内科の臨床実習の一環として2日間お世話になりました。その際に受講したセミナーが大変勉強になったことと、また大学病院での担当症例とは異なる種類の呼吸器疾患について勉強したいと考えたことから、「学外内科枠」として選択しました。

今回の実習で最も印象深く記憶に残ったことは、やはり院長先生直々に熱心なご指導を頂戴した胸部X線画像の読影法です。昨年度は、フィルム上になぜ線が形成されるのかという基本から、どの線に注目し読影を行えばいいのかといったポイントまで、正常画像の読み方をご教授いただきました。今回は異常画像の読影ということで、1日に1枚、任意に選んだ画像を読影するという演習形式で行いましたが、やはり読影上重要なのは、どの画像も順序立てて系統的に読むことだと気がきました。すぐに「心陰影拡大」や「胸水貯留」と飛びつくのではなく、撮影時の姿勢はどうか、胸郭を形成する構造物はどうかと順番に見ていくと、見落としも減り、異常な線を指摘できることが分かってきました。しかし、最終日の読影で重要な所見を捉えることが出来なかったことは非常に悔しく、まだまだ自分は未熟であることを思い知った出来事となりました。これからも基本的な方法論を堅持しながら論理的に読影し、病態生理と関連付けて解釈しながら1枚1枚を大切に勉強していきたいと思います。

また、今回は3週間の実習ということで、大学病院と同様に、患者さんを受け持たせていただきました。貴重な機会なので、結核の症例を勉強させていただきました。和歌山病院は現在では県内唯一の結核病棟を有する医療機関であり、他の医療機関では結核の診断や治療を集中して勉強できる機会が多くありません。しかし、結核は現在もなお、決して稀な疾患ではなく、日常診療でも疑わしい時はまず否定することが重要な感染症です。結核の検査や診断基準、入退院の基準は非常に論理的に作られており、正しく理解し対処すれば、感染の拡大も必要のない隔離も防ぐことが出来ます。指導医の先生にご教示頂いて印象深かったことの1つに「結核は他者のための入院と

なる」ということが挙げられます。確かに、担当させていただいた患者さんも、受け持ち時には既に落ち着いていらっしゃいましたが、喀痰検査での陽性が継続していたために、入院が続いていました。排菌の可能性があり、他者への感染のリスクがあるためですが、本人は自覚症状がないため、ただ退屈な時間を隔離された病室で過ごすこととなります。患者さんの同意を得ての入院とはなりますが、患者さんや家族の生活に及ぼす影響は大きく、結核への対応は医療者として深い思慮が求められることを痛感しました。これは結核病棟のない病院で結核を診断した場合も同様で、必要十分な対応によって、患者さんの負担を最適化できます。今後の医師人生に生きる重要な教訓となりました。

上記以外にも様々な疾患の聴診やポリソノグラフィーの解釈、人工呼吸器の設定、呼吸機能検査や細菌検査の実際、末梢静脈の確保等多くのことを勉強させていただきました。

末筆ながら、お世話になりました南方院長先生、駿田副院長先生、東先生はじめ和歌山病院の皆様に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。